慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	二、ハンザ研究の現状
Sub Title	
Author	近山, 金次(Chikayama, Kinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.16, No.4 (1938. 4) ,p.147(645)- 173(671)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	海外史壇紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380400-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゾビエスキーと自分である。それは二人共オーストリヤを助けたからである』と云つたと誌されてゐる。彼は數ケ月後に死んだが、その臣下のものはオーストリヤの忘恩が彼を殺したのであると考へた。二十年後にキヴァに有名なる騎馬旅行をせるバーナビーは『私のロシヤを旅行してゐる間、私はオーストリヤとドイツに對する――オーストリヤのクリミヤ戰爭の間になした行爲が惡感情として殘つて居り――敵意をあらゆる階級のものによつて示されるのに驚いた』と書いてゐる。この感情はロシヤ内のみならず、他國に於けるロシヤの友人の間にも存してゐた。例へば、ソルズベリーは一八七六年に記してゐる『如何にニコラスが叛亂せる王國に於て、如何なる他の君主もかつて示さなかつた勇敢さを以て、無償でフランツ・ヨゼフを恢復せしめるに助力したかを、そして如何にフランツ・ヨゼフが一八五四年の忘恩を以て彼に償つたか』をビスマルクが如何に熱心に述べたかを。ここにブオルが豫知しなかつた外交革命の結果があつた。ブオルの政策によりオーストリヤは一八一五年以來殆どたえず結ばれてゐた二つの同盟國を失ひ、その代りに永久的でない同盟を得、一八五九年一八六六年の結果となるのであつた。

二、ハンザ研究の現狀

近山金次

神聖ローマ帝國が衰微して行くにつれて北ドイツ諸都市に於ける商工業階級の間には獨立的機運が動き、强大な團結力が構成されることとなつた。かくて成立せる『ハンザ』なるものは其の貿易が北はロシヤより南はスペインにまで及び、ヨーロッパ各地と直接交渉を有ち、實に中世末期のヨーロッパに於ける重要な紐帶であつた。それ故ハンザの歴史は啻にドイツ史の一部門たるに止まるもので無く、ヨーロッパ史の重要な一部を構成するものなのである。ヨーロッパに於て最近二十年間と云ふもの此のハンザに關する研究は特に活氣があつた樣である。斯學の權威たるベルリン大學教授 W. Vogel 氏は一九三七年春 Revue Historique 第一七九卷に於てハンザ研究の現狀を左の

如く五項目に分けて説明してゐる。

一、史料及び出版機關

ドイツ・ハンザ史の研究は一八七〇年五月に設立された『ハンザ史學會』Hansischer Geschichtsverein を中心として行はれてゐる。本會は一三七〇年に締結された Stralsund 平和記念五百年祭に G. Waitz, K. Koppmann, W. Mantels の監修の下に設立されたものであり、當初より主力を史料の出版に置いてゐたことは特に G. Waitz の提唱に基づくものであつた。この出版物中ハンザ會議の議事錄（Rezesse）が第一位を占め、一八七〇年から一九一三年に至るまでに三部（二十四卷）出版され、年代から云ふと一五三〇年までのものが上梓されてゐるわけである。一五三一年から第十七世紀の中葉まで卽ちハンザ末期のものを含む第四部は現在 G. Wentz 氏の手で準備されてゐる。又此の出版物の第二位に當る Hansisches Urkundenbuch は、一九一六年に十一卷を算へ、年代から云ふと一五〇〇年迄下つてゐるが、第七卷（一四三四—一四五〇年）のみは編纂者が屢々更迭したため未だに出版されて居らなかつた。これも現在その編纂に當つてゐる H. G. von Rundstedt 氏の努力で目下印刷中である。更にまたその機關雜誌たる Hansische Geschichtsblätter（一九三五年の第六十一年號は一九三六年に Weimar で發行された）は近年その材料に於ても年代に於ても範圍を擴げてゐる。之は主として D. Schäfer（一八四五—一九二九年）の提唱によるもので彼等の事業が史料の出版を重ねるうち地方史の細かな穿鑿に埋もれてしまはない樣にと云ふ心配からであつた。斯くて彼等の事業は狹義のハンザ史以外にドイツ及び大西洋岸の貿易、海運、都市生活の歷史に就ても研究を重ねてゐる。その雜誌に毎年のせられる新刊書評（Hansische Umschau）はその廣汎な分野に亙

つてスカンヂナヴィヤ諸國、ベルギー、オランダ、フランスに於ける貴重な研究を紹介してゐる。この Rezesse と Hansisches Urkundenbuch の補足史料として缺くことの出來ぬ、ハンザ諸文庫の Inventare（目錄）はハンザ史に關係の深い第十六世紀の文書に就ての細かい知識を與へてくれる。この中、ケルンのもの（C. Höhlbaum と H. Keussen による）とダンチヒのもの（P. Simson による）とは既に以前から出版されて居り、同質の R. Häpke の Niederländische Akten und Urkunden zur Geschichte der Hanse und zur deutschen Seegeschichte 全二卷（第一卷は München と Leipzig で一九一三年に、第二卷は Lübeck で一九二三年に出た）は一五三一年から一六六九年までとなつてゐるが實際は第十六世紀に主力を注いでゐる。又前には Hansische Geschichtsquellen と云ふ名で出で、現在では Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte と云ふ標題になつてゐるものに於ては通常 Rezesse や Hansisches Urkundenbuch の中に含まれることの無い文書の刊行につとめ、或はまたハンザの内部に於ける交易の特殊事情に就ての研究史料を提供してゐる。一九〇八年 D. Schäfer によつて設立された Abhandlungen zur Verkehrs-und Seegeschichte の目的とせる所は商業交通の種々な部門に關する特殊研究論文の集錄であり、これは一九三三年以降は F. Rörig 及び W. Vogel の下に Abhandlungen zur Handels-und Seegeschichte と改題して續刊されてゐる。

二、ハンザの政治史

ハンザの起原及び本質に就ては以前非常に誤つた說が行はれてゐた。先づ第一にハンザを以て當時南ドイツに見られた諸都市の同盟と同じく完全な都市の同盟なりと見、從つて其の設立年代を求

めんとするが如き之である。元來ハンザなるものは異邦人に定められた都市若くは地方を定期的に訪れ、通常その地方の權力者から貿易に必要な保護の特權を得てゐた行商人達の數個の組合から生れたものである。hansa なる語はゲルマン系諸語に見られ、既にゴート語にあり、更に古代ドイツ語に於て『部隊、軍隊』(cohors) の意義を有つ語として存在し、後には意味が狹められて『行商人の部隊』を示すものとなつた。行商人の組合としてのハンザは居住せる都市の商人組合としてのギルドに相當するものである。斯かる諸都市の間にあつたハンザなるものは第十二、三世紀に於てドイツのみならずイギリス、フランドル各地に存在した。ロンドンに於けるフランドル系のハンザ、シャンパーニュの大市に於ける十七都市のハンザ等想起すべきである。かかる組織の中で最も大きく而も重要であつたのは Universitas communium mercatorum Gotlandian frequentantium（ゴットランドのドイツ商人組合）であつたが、之にハンザと云ふ名が用ひられて居らぬのは恐らく其の規模が普通の範圍を越えて居つた爲であらうかと推察される。第十四世紀になつて各都市の長官がフランドル、イギリス、ノールウェーに於て行商人の權利、特權を保證してやるために屢々干渉せざるを得なくなつて初めてドイツのハンザ (Dudesche Hense) なる名稱が商業都市の集團につけられるやうになつたのである。一三五八年ノールウェーに於て初めて Civitates de hansa Teutonicorum なる名稱が見られる。學者達はこの諸都市のハンザ (Städte-hanse) こそ所謂ハンザであると定義し、之を以前の商人のハンザ (Kaufmannshansen) と區別してゐるが、この區別は第十四世紀に存在したものではなく、事實內容を構成する要素は同じ人々であつたことを忘れてはならぬ。卽ち其等の都

市の役人達 consules は同時に商用で海外に赴いたものであり或はまた其の近親を派遣するかし、凡て之等の人々はロンドン、ブールジュ、ベルゲンにあつたドイツ商人の組合（ハンザ）員であるか會長であつた。この點を初めて明確にした W. Stein がハンザを以て單純な都市の『同盟』として取扱ふことの誤謬を指摘したのは正しかつた。それは元來、通商上の共同の特權を所有することを目的とする法的結合であつて今日のドイツ語で言ふ利益共同體(Zweckverband)に相當し、諸々の權益を確保增大せしめる目的から諸都市によつて形成された聯合である。勿論この目的はこの聯合をして必然的に政治團體として生育せしむる機運を生んだが、然も各都市は依然その政治的活動の自由を保持してゐたのである。勿論この利益共同體を屢々地域的に形成される同盟と同じものにし地方的君侯と結んで平和を維持しようとする試みもあり、斯うした試みは各都市の立場がばら〴〵になつて分裂的傾向が生じて來ると一層强制的に現れて來たことも事實である。然しハンザ諸都市全部の結合は勿論、その重要なるものの完全な結合すら達成されなかつた（W. Bode, Hansische Bundesbestrebungen in der ersten Hälfte des 15. Jahrhunderts, Hansische Geschichtsbl., 1919, 1920-21, 1926）。ハンザ諸都市の聯合が强く主張され出したのはその勢力の衰へた末期の事柄である（G. Fink, Die rechtliche Stellung der deutschen Hanse in der Zeit ihres Niedergangs, Hans. Geschichtbl., 1936）。

科學的研究のつまれた現狀に相應するハンザの詳細な一般史は不幸にして未だ出版されて無い。その困難は實に文獻の廣過ることである。Hanserezesse 監修の一員であり、また少くとも Koppmann の死（一九〇五年）後、ハンザ史研究の最高權威であつた Dietrich Schäfer 教授は一般史

(Die Hanse, 3 te Aufl., 1925) を書いたのであるが、通俗を旨として註を附せず、從つて力の入つたものでは無い。Ernst Daenell の Die Blütezeit der Deutschen Hanse, 1906 は詳細で且つ文獻に富んでゐるが「第十四世紀後半より第十五世紀末に及ぶハンザ史」なる標題の示す如く取扱はれてゐる時代が制限せられてゐるばかりで無く、その立案や表現にも生硬な所があり、なほ此の書に就てはハンザの本質やその他重要な諸點で批難の餘地があることを既に W. Stein も指摘してゐる (Göttingische gelehrte Anzeigen, 1907)。從つて之は一般史としては勿論、一三五六年から一四七四年までの歷史としても滿足なものでは無い。Walter Stein こそこの歷史を書くに最も適しき人であつた。彼の書いた堂々たる研究論文は數多く殘つてゐるが（主として Hansische Geschichtsblätter に掲載さる）、惜しいことにこの謙讓な碩學は自ら計畫し著手してゐたハンザの一般史を完成することなく夭折した。W. Vogel 自身も Kurze Geschichte der deutschen Hanse (1915) なる一般史を書いたが、大衆目あてなので簡單にして脚註も省略されてゐる。Vogel は同じ頃 Geschichte der deutschen Seeschiffahrt を出してその方面に於けるハンザ史の重要事項を論究してゐる。Kurze Geschichte に掲げられてゐる重要な問題としては(一)バルト海と北海との連絡卽ちズンド海峽による航路とシュレスウィヒ・ホルスタイン地峽を通過する數條の陸路との對立關係、(二)重大な時機に常にハンザの政策を左右するデンマルクとの關係、(三)大抵の場合リュベックの政策によつて代表されてゐるハンザ聯合の一般的利益と諸都市、例へば一方に於てダンチヒやリヴォニヤの都市或はまた他方に於てケルンと云ふ樣な都市の異つた特殊利益との食ひ違ひ等がある。近く F. Rörig がハンザの起原及び

發達に就て良著を出す筈である。この人の方法論はSteinのものと全く異つてゐる。Steinの研究は專門家を相手にして文獻に含まれる傳統に就て深い鋭敏な觀察を下し、ハンザの政策に於ける複雜な要素を好んで檢討しようとするが、Rörigは概して會議に關聯のある短い論文に於て種々な見方を通して、兎も角一つの一般的見解に到達せんことを求め、些細な事實の檢討にかかはり會ふことを避けてゐるのである。その出發點は寧ろ社會經濟史的である（その主なる論文の名を擧げれば Aussen-und innenpolitische Wandlungen der Hanse nach dem Stralsunder Frieden 1370; Die Hanse und die nordischen Länder; Die deutsche Hanse, Die geistigen Grundlagen der hansischen Vormachtstellung; Die deutsche Hanse, Wesen und Leistung; Rheinland-Westfalen und die deutsche Hanse 等）。これまで彼の研究によつてハンザ研究の上に初めてもたされた新見解を二、三擧げて見ると（一）バルト海諸都市の建設及びバルト海地方に於けるドイツ商業の進展に於て眞に決定的な要素であつたものは諸侯の經營では無くして實は商人の企業心であり、遠隔の地に交易せる商人の大家族の血緣關係こそハンザの商業組織建設に際して看過し得ぬ重要な役割を演じてゐること、之等の家族は往々にしてウェストファリヤやライン河畔から來たものであるが、東方貿易發展の上で最も近い根據地であり出發點であつたリューベックが少くとも二百年間その中心をなしてゐたこと、（二）一三〇〇年頃、文書による聯絡の設置せられたことは舊來行商人、隊商等により實施せられてゐた商路を刺戟開發して確實性を有たせ又代表や委員の制度を起し、商業技術に寄與するところ頗る大であつたこと、（三）ハンザ及びハンザの商業政策に就て其の本質を論ずる場合、保護貿易主義や或は又ハン

ザ史の末期に於て現はれる商業制限の傾向などを以てしては全く誤りであること、（一三七〇年頃までの）初期にあつては寧ろ商業自由の原則に從ひ、その企畫に於ても概して君主より獨立してゐたこと、等である。Rörig の門弟 E. G. Krüger はその論文 Die Bevölkerungsverschiebung aus den altdeutschen Städten über Lübeck in die Städte des Ostseegebiets, 1934に於て遠地にある商人の家族間の關係、この點に於けるリューベックの重要性を研究してゐる。その他の最近二十年間の研究はハンザ全盛時代の政治史に就て餘り得るところが無かつた。何と云つても Stein, Schäfer, Daenell の研究に附加すべきものとては殆んど無いのであるから之は當然の話である。それでも G. Neumann の Heinrich Castorp 1415-1488,（リューベック市長）研究（1932）や H. Reincke のカール四世（ハンザの政治的發展を考慮せる人）研究（1924, 1931）を擧げて置く必要がある。ハンザの起原及び初期の研究に就ては H, Hofmeister（Heinrich der Löwe und die Anfänge Wisbys, 1926 ; Der Kampf um die Ostsee vom 9. bis 12. Jahrhundert, 1931）やスエーデンの學者 Sven Tunberg（Visby-Lybeck, 1924）及び H. Schück（Det svenska stadsväsendets uppkomst och äldsta utveckling, 1926）の名を數ふべきであり、衰頽及び末期の研究家としては R. Häpke（Die Regierung Karls V und der europäische Norden, 1914 その他）, Hanserezesse 第四部の刊行につとむる G. Wentz, 更に G. Waitz（Lübeck unter Jürgen Wullenwever und die europäische Politik, 1855-56）, また Häpke の弟子 L. Beutin（Hanse und Reich im handelspolitischen Endkampf gegen England, 1929 ; Der deutsche Seehandel im Mittelmeergebiet bis zu den Napoleonischen Kriegen, 1933）の名を記憶すべきである。

三、ハンザの地方史

抑々ハンザの重要性は東北部の原料産地と西南部の工業地帶との間に介在して演じたその役割にある。西南部ではフランドル地方が第十五世紀初頭迄第一位を占めてゐたことは明白でブラバン、オランダ、イギリス、フランス等は漸く後期になつて之に匹敵するものとなり、ポルトガル、スペインに至つては更にずつと遲れてゐた。

フランドルのブールジュに於ける商館に就ては R. Häpke (Brügges Entwicklung zum mittelalterlichen Weltmarkt, 1908), H. Wink (Untersuchungen zur Entstehung des Westfäl-preuss. Drittels der Deutschen Genossenschaft zu Brügge, 1927) の著作があり、ポーランドの學者 M. Malovist はハンザ都市たるトルン、クラカウと此のフランドルとの關係を論じてゐるし (Le développement des rapports économiques entre la Frandre, la Pologne et les pays limitrophes du XIIIe au XIVe siècle, 1931)、ベルギー學界も H. Pirenne の指導の下に H. van Werveke, F. L. Ganshof, J. de Sturler (Les relations politiques et les échanges commerciaux entre le duché de Brabant et l'Angleterre au Moyen Age), H. Laurent, R. de Roover, Floris Prims (Geschiedenis van Antwerpen, 1927), J. A. Goris (Etude sur les colonies marchandes méridionales à Anvers de 1488 à 1567, 1905), J. Strieder (Aus Antwerpener Notariatsarchiven, 1930) 等が此の方面の研究に對して數多の業績を殘してゐる。

オランダ東半部の諸都市 Zutphen, Deventer, Kampen, Zwolle は元來ハンザに包括されてゐたもので、既に大戰前よりオランダの古文書學者 P. A. Meilink の著作 (De Nederlandsche Hanzesteden tot het laatste Kwartaal der XIV eeuw. Proefschrift

Univ. Groningen, 1912) があり、最近では Z. W. Sneller の良著 Deventer : die Stadt der Jahrmärkte, 1936 がある。

ハンザの圏外にあつたゼーランド、フリースランドなどのオランダ西半部の地は、第十五世紀初頭以來バルト海貿易の覇權を挾んでハンザとの競爭を始め、一六〇九年以後は大發展を遂げ、遂にハンザの後繼者となつた。この經緯を論じたものは Fr. Vollbehr の Die Höllander und die deutsche Hanse, Pfingsblätter, 21, 1930 がある。この他、オランダ學界に於ける H. J. Smit (Bronnen tot de geschiedenis von den Handel mit Engeland, Sohotland en Jerland, 1928 ; De Beteekenis van den noordnederlandschen in't biiz. van den hollandschen und zeeuwschen handel in de laatste helft der 14e eeuw., 1929), W. S. Unger (Bronnen tot de geschiedenis van Middelburg in

den landsheerlijken tijd, 1923, 1926, 1931), Z. W. Sneller (Walcheren in de 15e eeuw, 1917), J. G. Nanninga (Het handelsverkeer der Oesterlingen door Holland in de dertiende eeuw, 1921 ; De handelsweg door Holland in de dertiende eeuw, 1925 等オランダの河川と運河による內陸水路の研究) の業績は忘れることが出來ない。

ハンザとイギリスとの關係は一三七一年から一五一〇年までに就て F. Schulz の Die Hanse und England von Eduards VI. bis auf Heinrichs VIII. Zeit, 1911 が出て以來新研究は殆んど無い。特筆すべきは K. Engel の第十四、五世紀に於けるイギリスのハンザ商人に關する研究 (Hans. Geschichtsbl., 1913, 1914) と M. Weinbaum の Stalhof und deutsche Gildehalle zu London, Hans. Geschichtsbl., 1928 であつて、L. Beutin の Hanse und Reich im handelspolitischen Endkampf gegen England (1929)

を補足するものとしては F. Fiedler (Danzig und England 14.-17. Jahrhundert, 1928), J. R. Marcus (Die handelspolitischen Beziehungen zwischen England und Dentschland in den Jahren 1576-1585, 1925), Astrid Friis (Alderman Cockayne's project and the cloth trade, 1927) 等の論文がある。最近のものとしては E. Power と M. Power の兩者によつて刊行された Studies in English trade in the XVth century (1933) が貴重な研究資料を提供してゐる點で注目に値する。G. Neumann の詳細な研究(Hans. Geschichtsbl., 1935)と共に併せ讀むべきである。

ハンザとフランスとの緊密な取引關係は一三七〇年以後 Noirmoutier 灣の鹽の輸出が始まつて以來のことである。A. Agats の Der hansische Baienhandel に關する基礎的研究があつて以來、ハンザとフランスとの關係に就ては O. Held (W. Stein の門弟) の忠實なる研究が出たのみである。本書は一四四〇年から一四八三年までの時期を取扱ひ、主として一四六四年に於けるルイ十一世の特權賦與と、王がイギリス及びブルゴーニュに對抗してハンザと協調せんとするに至る經緯を論述してゐる。第十六、七世紀に就ては別に研究はない。第十六世紀の中頃まで特にブルアージュ (Brouage) を通して盛に行はれてゐた鹽の輸出は爾後宗教戰爭のために著しく減少した。一六五五年ルイ十四世がハンザ諸都市と通商條約を締結して漸く復活する樣になつたが、ハンザの全盛時代は既に遠く過去の話となつてゐて、ただリューベック、ハンブルグ、ブレーメン、ダンチヒの四市だけがハンザの傳統を維持してゐたのである。けれども此の當時葡萄酒その他フランス植民地の産物を取扱つた商業の重要性を看過してはならぬ。一七八九年ドイツのハンザ諸都市はオランダ、イギリスを凌

いでフランス商品の輸入國であつた（cf. J. B. Manger : Recherches sur les relations économiques entre la France et la Hollande pendant la Révolution française, 1785-1795）。

第十六世紀にフランスが失つたものをポルトガルとスペインが獲得した。卽ち鹽の輸出港 Setubal や San Lucas は一五七〇年頃よりリスボン、セヴィラ、カヂスと同じくハンザ商船の主要な目的地となり、彼等はオランダ人（一五六九—一六〇九年、內亂に苦しむ）と競爭して此地に現れ、一六〇九年の休戰以後もなほ相當の活躍を見せてゐた。前に述べたハンザ史學會は以前より文書を集錄してハンザとスペインとの關係を明確にせんとし、D. Schäfer の門弟 B. Hagedorn はこの使命を帶びて努力を重ねてゐたのであるが、大戰勃發と同時に殺され、その文書は未刊のままリューベックの古文書館に保管せられてゐる。第十六世紀から第十七世紀にかけての經濟史の關聯を知悉してゐた彼こそはこの仕事に最も適はしき人物であつたと云はなければならない。同じ計畫を立ててゐるオランダの諸學者と協力して此の仕事を再現せんとする試みが屢々なされたが、今日至るも實現してゐない。また地中海地方の問題に就ては既述の如く L. Beutin の著述がある。

ヨーロッパの南部、西南部に於けるハンザ貿易の研究はその性質上、後期に深い關係があるが、スカンヂナヴィヤ、バルト海地方に於ける交易の研究は寧ろハンザの發生期、全盛期に關係をもつ。ハンザの問題に關するスカンヂナヴィヤの諸學者の仕事は幸運にもドイツのものと併行してゐる。

ノールウェーに於ては長い間 A. Bugge の研究が經濟史に於ける首位を占めてゐたが、なほ特筆すべきものとしては Chr. Koren Wiberg のベル

ゲンに關する研究 (Det. Tyske Kontor i Bergen, 1899; Bergensk Kulturhistorie, 1921; Hanseaterne og Bergen, 1932)、O. A. Johnsen のオスロー及び Tönberg に關する研究 (Der deutsche Kaufmann in der Wiek in Norwegen in späteren Mittelalter, Hans. Geschichtsbl., 1928, S. 66-77)、O. Röhlk の同地方に於けるハンザの商業政策に關する研究 (Hansischnorwegische Handelspolitik im 16. Jahrhundert, Abh. zur Handels-und Seegeschichte, III, 1935) 等がある。ノールウェーに於けるハンザの經濟的政治的重要性に對する批判は是迄屢々論究せられた所であり、P. A. Munch や E. Sars の如き昔の學者は何れも其の必要と效果を說明したものであるが A. Bugge は之に反してハンザがノールウェーの商業に與へた損失を强調した。Chr. Koren Wiberg はこの見方の大げさなことを指摘し、常に兩者の間に平和な友好關係が存在したことを主張したのである。若きノールウェーの學者 Johan Schreiner は最近この問題を再びとり上げて冷靜な客觀的立場から次の如く論斷してゐる。ノールウェーに於けるハンザの獨占的地位は市民や漁夫に缺くべからざる穀物の引渡をハンザ諸都市のみがなし得た事實からも明白であるが、また彼等はノールウェーの鱈に對して全ヨーロッパの廣大な市場を開放したものである、從つて經濟的見地からすればノールウェーにとつては何等の不都合もなかつた、けれども政治的見地に立つと當時全く無力なスカンヂナヴィヤ聯合王國にハンザが與へた助力なるものはノールウェーにとつて決して幸運な結果を齎さなかつたのである、と (Hanseatene og Norges Nedgang, 1935)。斯くて Schreiner の書はハンザに對して國家的商業政策を行はんとしたノールウェー政府の種々な試みを驚くべきほど明確に論述してゐる。

スエーデンとの貿易はノールウェーとの貿易に比して遙かに重要性が少なかつた。ベルゲンに於けるが如き大きな商館はスエーデンには出來なかつた。けれどもドイツ商人、工匠、坑夫の移住は同地の都市生活の進展にとり必要缺くべからざるものであつた。ストックホルムは Visby と同じく長い間半瑞半獨の都市であつた。この方面の研究では A. Schück (Det Svenska stadsväsendets uppkomst och äldsta utveckling, 1926 ; Die deutsche Einwanderung in das mittelalterliche Schweden und ihre kommerzielen und sozialen Folgen, Hans. Geschichtsbl., 1930)、N. Ahnlund (Svenskt och Tyskt i Stockholms äldre Historia, Histor. Tidskrift., 1929) の名を擧ぐべきであり、史料集としてはストックホルム市の出版物が最も重要である。またスエーデンの Delécarlie, Vesterås, Falun 等に於ける製銅工業の發生に對するドイツ人の功績に就ては Sv. Tunberg (Stora Kopparbergets historia, Förberedande undersökningar, 1922) や Tom Söderberg (Stora Kopparberget under medeltiden och Gustav Vasa, 1932) の仕事を想起すべきである。金屬（銅鐵）及びその他の商品（毛皮、獸皮、牛酪）の輸出、並びに一三六八年から一四〇〇年までのハンザの輸入貿易に就ては獨瑞双方の文書を檢討した驚くべき W. Koppe の仕事がある (Lübeck-Stokholmer Handelsgeschichte im 14. Jahrhundert, Abh. zur Handels-und Seegeschichte. II, 1933)。彼は Rörig の學派に屬し、特に取引の方法、價額、數量、ハンザ商人の個性及び家族關係や社會的地位などに就て之を明かにしてゐる。また彼は中世に於て北海沿岸に位したスエーデンの港 Lödöse とリューベックとの關係に就ても研究を出してゐる (Lübeck und Lödöse im 14. Jahrhundert, Göteborgs Kungl. Vetenskaps-och Vitter-

hets-Samh. Handlingar, 1933)。最近出たW. Silberschmidtの論文はスエーデンの鑛業及び其に對するドイツの影響に就てTunberg, Söderberg, Koppeの說を是正してゐる。彼はGoslar採掘法のスエーデンに對する直接影響を否定するものである(Das schwedische Bergrecht als Prüfstein für das Bergrecht von Goslar und für die Entstehung der Gewerkschaft, Zeitschrift für Bergrecht, 1935)。

デンマルクとハンザとの貿易に於てはスカニヤの鰊漁が第十六世紀まで首位を占めて居つた。鰊の輸出量に關する數字はCurt Weibullの研究により訂正せられて在來の三倍となり(Lübeck och Skåne matrknaden, 1922)、更に最近の研究によればその數字は一層增加せしめらるべきものであるらしい(cf. G. Lechner, Die hansischen Pfundzollisten des Jahres 1368, 1935)。第十六世紀以後になるとスカニヤの鰊漁はその重要性を失つてハンザの力點はズンド海峽の運輸に置かれる。これハンザの有力な競爭者たるオランダ人がズンドを直航してバルト海に入つたためであり、その性質上全く消極的な試みであつた。元來ハンザ都市そのものがズンド海峽運輸の利害に就てはまち〳〵であり、デンマルク王より許可せられるズンド海峽航行權なるものが貿易にとつては重大な負擔であつたのである。ズンドの關稅に關するCh. E. HillのThe Danish Sound dues and the command of the Baltic, 1926なる研究は表面的な政治的な問題に局限されてゐる。ズンド關稅の記錄が海上貿易の統計資料として價値あるものなることは、夙くよりハンザ史家の認むるところであつた。特にD. SchäferはデンマルクのNina Ellinger Bangのその圖表による出版の大計畫に助力を與へ其の繼續を財政的に可能ならしめた(Tabeller

over Skibsfart og Varetransport gennem Öresund, 1906–1930)。この圖表に見られる船舶の數や商品の量に就ての知識に關しても最近二名の若いデンマルクの學者 Astrid Friis (Bemaerkninger til Vurdering af Oeresundstoldregnskaberne, Hist. Tidskr., 1926) と A. E. Christensen (Der handelsgeschichtliche Wert der Sundzollregister, Hans. Geschichtsbl., 1934) が他の統計資料との比較研究を重ねて之に嚴密愼重な批判檢討を加へてゐる。

ロシヤに於けるハンザ貿易はノヴゴロドの商館に集中されてゐた。バルト海沿岸のハンザ都市、特に Reval, Dorpat, Riga は第十四世紀末以來仲介者として次第にその重要性を增した。Schra 卽ちノヴゴロド商館の組織に關する定款は W. Schlüter により刊行され (Die Nowgoroder Schra in 7 Fassungen vom 13.–17. Jahrhundert, 1914–1916)、同じく重要なロシヤ諸侯との通商條約も L. K. Goetz によつて刊行された (Deutsch-russische Handelsverträge des Mittelalters, 1916)。Goetz はまた中世に於ける獨露通商の概說をも世に出して居り、これはロシヤ側の資料を見る上に於て貴重な便利な著述である (Deutsch-russische Handelsgeschichte des Mittelalters, Hansische Geshichtsquellen, 1922)。ノヴゴロドに於けるドイツ商人の生活や同地に到る旅程等に就ては M. Gurland (Der St. Peterhof zu Nowgorod 1361–1494. Innere Verhältnisse, 1913) や W. Stein (Sommerfahrt und Winterfahrt nach Nowgorod, Hans. Geschichtsbl., 1918) の研究がある。

リヴォニヤ(今日のエストニヤ及びリトワニヤ)のハンザ諸都市の西方世界或は東方ロシヤとの關係に就ては P. v. d. Osten-Sacken (Der Kampf der livländischen Städte um die Vorherrschaft im Hansekontor zu Nowgorod bis 1442, 1912) や H.

G. v. Schroeder (Der Handel auf der Düna im Mittelalter, Hans. Geschichtsbl., 1917)や H. Cosack (Livland und Russland zur Zeit des Ordensmeisters Johann Freitag, 1483-1494, Hans. Geschichtsbl., 1923, 1925, 1927) や G. Hollihn (Die Stapel- und Gästepolitik Rigas in der Ordenszeit 1201-1562, Hans. Geschichtsbl., 1935) 等の論文がある。

四、交易、運輸、生産の歴史

リューベックの古文書とりわけ其の Oberstadtbuch (不動産を記載しあるもの) を探究した F. Rörig は一三〇〇年頃に於ける不動産の狀態はこれを明確にし得ることを述べ (cf. P. Rehme ; Das Lübecker Oberstadtbuch, 1895 : Über Stadtbücher als Geschichtsquellen, 1913 : F. Rörig ; Zür Stadtbuchforschung, Zeitschrift des Vereins für Lübeckische Geschichte ,1914)、熱心な研究の結果、先づ市場に於ける財産の狀態を明かにした。市場の區域や構成は殆んど都市や共同體に關はり無く、寧ろ市會に代表者を出してゐる樣な數個の大家族に關係を有つてゐたらしい。斯くの如き財産の配分は其の約百三十年前に於ける都市建設の時代より由來したものでなければならず、一三〇〇年に於ける資産家の中に吾人は同市の建設者の組合の名殘を見ることが出來るであらうと言つてゐる (Der Markt von Lübeck, 1922, 1927)。この說は種々な方面から非難せられたけれども未だ論駁されてはゐない (G. v. Below は Vierteljahrsschrift für Sozial- und Wirtschaftsgesch., 18, 1926 の中で、その他 W. Krogmann, Die Eigentumsverhältnisse des Lübecker Marktes um 1300 und ihre Erklärung も同誌 20, 1928 に載せられて居り、また Luise von Winterfeld, Versuch über die Entstehung des Marktes und den Ursprung der Ratsverfassung in Lübeck は Zeitschrift des Vereins für Lüb. Gesch., 25,1929

にあり、Theodor Mayer は Zur Frage der Städtegründungen im Mittelalter を Mitteilungen des Inst. für österr. Geschichtsforschung, 43, 1929 に載せ、R. Häpke も Hans. Geschichtsbl., 1922 にその意見を述べてゐるが、凡て之等に對し Rörig は Hansische Beiträge zur deutschen Wirtschaftsgeschichte, S. 87–92 に應酬してゐる。之に同意するものには F. Techen, Hans. Geschichtsbl., 1922; R. Kötzschke, Hist. Zeitschrift, 127, 1932; P. Rehme, Zeitschrift der Savigny-Stiftung für Rechtsgesch., Germ. Abt., 43; J. Strieder, Archiv für Sozialwiss. und Sozialpol., 51; K. Frölich, Zeitschrift d. Ver. f. Lüb. Gesch., 22 ; Zeitschr. d. Savigny-Stiftung f. Rechtsgesch., G. A. がある)。この研究の結果 Rörig はハンザ初期（第十三、十四世紀）に於てとりわけ顯著に見られる豪商の家族の緣故關係にも留意することになつた(Lübecker Familien und Persönlichkeiten aus der Frühzeit der Stadt, 1925; Grosshandel und Grosshändler im Lübeck des 14. Jahrhunderts, 1926 ; Die Gründungsunternehmerstädte des 12. Jahrhunderts, Hans. Beitr. zur deutschen Wirtschaftgesch.)。これに就ては既に言及したが、特筆すべき一例は Veckinghusen 家の勢力範圍であり、第十五世紀の初頭に於て其はブールジュ、ケルンよりリューベックを經てリガ、レヴァルに及び、また南はフランクフルト、アウグスブルグ、ヴェニスにまで擴がつてゐた。Hildebrand Veckinghusen の書信は W. Stieda により刊行されたがその證書は大部分未刊のままである (Hildebrand Veckinghusen, Briefwechsel eines deutschen Kaufmanns im 15. Jahrhundert, 1921 : cf. B. Kuske, Die Handelsgeschäfte der Brüder Veckinghusen, Hans. Geschichtsbl., 1922 : L. von Winterfeld, Hildebrand Veckinghusen, Hansische Volkshefte,

1928)。Rörig はまたリューベックに於ける豪商の不動産及び負債の狀態を研究し、ハンザの商取引特に信用制度の狀況を檢討してゐる(Das Lübecker Niederstadtbuch des 14. Jahrhunderts, Festschrift dem Deutschen Juristentag in Lübeck 1931 dargebracht vom Verein für Lüb. Gesch. und Altertumskunde, 1931)。この方面の研究に就ては彼の弟子 A. v. Brandt (Der Lübecker Rentenmarkt 1320-1350, 1935)、G. Franke (Lübeck als Geldgeber Lüneburgs, 1935) 等の興味ある論述があり、Rörig 自身もリューベック商人に就て立入つた研究を殘してゐる (Das älteste erhaltene deutsche Kaufmannsbüchlein, Hans. Geschichtsbl., 1925, Hansische Beiträge zur deutschen Wirtschaftsgeschichte, 1928 : Das Einkaufsbüchlein der Nürnberg-Lübecker Mulich's auf der Frankfurter Fastenmesse des Jahres 1495, 1931)。南北ドイツの交易は特に第十五世紀末に於て重要性を占めるものであり、之に就ても K. Schlüese (Die Handelsbeziehungen Oberdeutschlands, insbesonders Nürnbergs zu Posen im Ausgange des Mittelalters, 1915), E. Birkner (Die Behandlung der Nürnberger im Ostseegebiet, 1927), Claus Nordmann (Nürnberger Grosshändler im spätmittelalterlichen Lübeck, 1933) の仕事を記憶すべきである。かくて Rörig は之等凡ての研究を綜合し、ハンザ諸都市が中世期末に於て商業中心地であつた事を美事な筆致で Propyläen-Weltgeschichte 第四卷 (Das Zeitalter der Gotik und der Renaissance, 1250-1500, 1932) と、次で講演 Mittelalterliche Weltwirtschaft (1933) とに於て描いてゐる。彼は痛烈に Bücher (Die Entstehung der Volkswirtschaft, 1893) の唱へた職人根性に閉ざゐる都市經濟及び自給自足的傾向に關する說を攻擊する。彼によれば此の間違ひは國際

的に活躍してゐた大都市の商人の役割を忘れたものであり、後期の衰頽せる狀態を餘に念頭に置きすぎたものなのであつて、ドイツに於けるハンザの如き現象は遠距離の交易を度外視しては到底說明し得るものでは無いのであるが、然もまた吾人は同時にビュッヘルの指摘した如く、とりわけ東部のドイツ植民地に於ける極限された地方交易の重要性をも忘れてはならぬのである（R. Koebner, Locatio. Zur Begriffssprache und Geschichte der deutschen Kolonisation, 1929. Deutsches Recht und deutsche Kolonisation in den Piastenländern, 1932: K. Kasiske, Die siedlungstätigkeit des Deutschen Ordens im östlichen Preussen bis zum Jahre 1410, 1934）。國境、關稅を超えて生產者から消費者へと商品をもたらした中世の「世界經濟」は印度洋からアイスランドへ、西アフリカからシベリヤに及んだものであるが第十六世紀から第十八世紀にかけて商業の變遷を受け、次第に國民經濟の性質を帶びることになつた。さりとは言へ吾人は此の事實から當時各國間に於ける交易に減退があつたなどと考へてはならぬ。國民國家孤立への傾向は重商主義による輸出の奬勵や人口增加による需要の增加によつてはつぐなひ得なかつたものなのである。この他 H. Bechtel の Wirtschaftsstil des deutschen Spätmittelalters (1930) には一三五〇年より一五〇〇年にかけてのドイツ商工業の便利な概觀があり、また R. Häpke は各都市間の協力に就ての研究（Die Entstehung der holländischen Wirtschaft, 1928, Die ökonomische Landschaft und die Gruppenstadt in der älteren Wirtschaftsgeschichte, 1928）を發表し、例へばフランドル諸都市の結合と云ふ樣な經濟地帶の結合に就て論じてゐる。この方面の研究には Hildegard Schulz (Die wirtschaftliche Struktur des Oberharzes und seines nördlichen

Vorlandes, 1931), H. Jordan (Das Textilgewerbe in der mittelalterlichen Grafschaft Flandern, seine räumlichen Beziehungen und Zusammenhänge, 1932), H. Bechtel (Der ökonomische Raum für den Handel im späteren Mittelalter, 1929) 等の論文がある。B. Kuske (Quellen zur Geschichte des Kölner Handels und Verkehrs im Mittelalter, 1917–1934 ; Die Kölner Handelsbeziehungen im 15. Jahrhundert, 1909 ; Handel und Handelspolitik am Niederrhein vom 13.–16. Jahrhundert, 1909 ; Kölner Fischhandel vom 14. bis 17. Jahrhundert, Westdeutsche Zeitschrift, 24 ; Köln, zur Geltung der Stadt, ihrer Waren und Masstäbe in älterer Zeit, 1935), H. Jecht (Beiträge zur Geschichte des ostdeutschen Waidhandels und Tuchmachergewerbes, Niederlausitzer Magazin 1923–1924), H. Hohls (Der Leinwandhandel in Norddeutschland vom Mittelalter bis zum 17. Jahrhundert, 1926 ; cf. A. Braun, Der Lübecker Salzhandel bis zum Ausgang des 17. Jahrhunderts, 1926), M. Hofenbrock (Lübecker Kapitalsanlagen in Mecklenburg bis 1460, 1929) 等何れもハンザ各地に於ける農工業の生産關係に就て檢討してゐる。例へば最後のものは、第十三世紀から第十四世紀にかけてのメクレンブルグに於ける農業を、リューベックの豪商の投資と結びつけて說明してゐるが如きそである。

海運はハンザの交易に於ける最も重要な運輸の手段であつた。Vogel の Geschichte der deutschen Seeschiffahrt (1915) は第十五世紀末に及ぶハンザの海運を各方面に亙つて詳細に論述してゐる。B. Hagedorn その他の人々による研究を加へて、第十六、七世紀まで、これを補ふことが出來る (J. Müller, Handel und Verkehr Bremens im

Mittelalter, 1927-1928 ; C. Brämer, Die Entwicklung der Danziger Reederei im Mittelalter, 1922 ; M. Christlieb, Rostocks Seeschiffahrt und Warenhandel um 1600, 1934 ; B. Hagedorn, Die Entwicklung der wichtigsten Schiffstypen bis ins 19.Jahrhundert, 1914 ; H. Szymanski, Deutsche Segelschiffe. Die Geschichte der hölzernen Frachtsegler an den deutschen Ost-und Nordseeküsten, vom Ende des 18. Jahrhunderts bis auf die Gegenwart, 1934)。なほ Vogel は未刊の第二卷に對する準備として第十七、八世紀のリューベック及びダンチヒに於ける海運及び商品の統計を發表した(Beiträge zur Statistik der deutschen Seeschiffahrt im 17. und 18. Jahrhundert. I : Lübeck, Hans. Geschichtsbl., 1928; II : Danzig, ib., 1932)。また彼は第十五世紀より第十七世紀に及ぶオランダ、ドイツ(卽ちハンザ)、イギリス、フランスの商船隊の構成に關する比較研究を試みてゐる (Zur Grösse der europäischen Handelsflotten im 15. 16. und 17. Jahrhundert. Ein historisch-statistischer Versuch., 1915)。G. Lechner の Die hansischen Pfundzollisten des Jahres 1368 (Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte, x, 1935)はハンザの全盛時代を取扱つてゐる。Pfundzoll とはデンマルクの Waldemar IV に對する抗爭の資金としてケルン聯合に關係ある海岸諸都市から徵收された商品船舶への課稅である。これはリューベックに二つの痕跡を殘した。先づ第一にリューベックに出入せる商品船舶數を記せる Pfundzollbuch, 第二にリューベックに到着せる船長、商人が提示せる Pfundzoll の領收書、これである。凡て之等の資料を著者は商業史研究の材料として極めて巧みに整理してゐる。その中にはリューベックを出帆するもの九一二、入港するもの八六三、同じ船もあつて計六八〇艘の

船が擧げられてゐる。最後に W. Tesse がハンザ諸都市の貨幣制度に就て重要な新研究を發表してゐること (Der wendische Münzverein, 1928 : Die Münzpolitik der Hansestädte, 1928) と H. Planitz がハンザ商權の基本的特質を論じてゐることを附記して置く (Ueber hansisches Handels-und Verkehrsrecht, Hans. Geschichtsbl., 1926)。

五、ハンザ諸都市の歴史

先づ第一にハンザに對する參加の問題とハンザ都市の數の問題がある。W. Stein は Die Hansestädte (Hans. Geschichtsbl., 1913, 1914, 1915) の中で殆んど決定的にこの問題を解決してゐる。第十六世紀までハンザの指導都市であつたリューベックに就ては總括的な良著は未だ存在してゐないがリューベックの自由七百年祭に刊行せられた市史 Geschichte der freien und Hansestadt Lübeck, 1926 の中で F. Rörig は中世期を概説し、J. Kretzschmar は近代に於けるその發展を説いてゐる。最近出た A. Düker の研究 (Lübecks Territorialgebiet im Mittelalter, 1933) と P. Kallmerten の研究 (Lübische Bündnispolitik von der Schlacht bei Bornhöved bis zur dänischen Invasion unter Erich Menwed, 1227-1307, 1932) とは共にその初期に於ける同市の政治を取扱つて居り、學ぶべき所が多い。社會經濟と密接な關係を有つ初期二百年間の同市の建築事業に就ては Fritz Lenz の論文 (Die räumliche Entwicklung der Stadt Lübeck bis zum Stralsunder Frieden 1370, 1936) がある。『北海のリューベック港』とも見るべきハンブルグに關しては一八四二年の大火災に文書が燒失したので研究が困難である。(ハンブルグの史料に就ては初め J. M. Lappenberg, 後には H. Nirrnheim 及び E. von Lehe が編纂の衝にあたり、既に一三三〇年頃までは整理されてゐる)。特に商業史

に力を入れた詳細な E. Wiskemann の書 (Hamburg und die Welthandelspolitik von den Anfängen bis zur Gegenwart, 1929) よりも簡單な H. Reincke の著述 (Hamburgs Geschichte, 1933) の方が優れてゐる。近刊では L. Lahaine, R. Schmidt 共著の Hamburg, das deutsche Tor zur Welt. 1000 Jahre hamburgische Geschichte (1936) がよい。また同市の Pfundzoll に就ても H. Nirrnheim の發表 (Das hamburgische Pfundzollbuch von 1369, 1910 ; Das hamburgische Pfundzollbuch von 1399 und 1400, 1930) がある。鹽の都リューネブルグに就ては W. Reinecke (Geschichte der Stadt Lüneburg, 1933), 麥酒で名高い Wismar に就ては F. Techen (Geschichte der Seestadt Wismar, 1929) がそれぞれ一書をものしてゐる。Rostock と Stralsund に就ては二、三の論文があるだけでまとまつた科學的な歴史は無い (cf. H. V. Römer, Das Rostocker Patriziat bis 1400, 1932 ; C. Leps, Das Zunftwesen der Stadt Rostock bis um die Mitte des 15. Jahrhunderts, 1933, 1934; M. Christlieb, Rostocks Seeschiffahrt und Warenhandel um 1600, 1934)。ダンチヒに關しては E. Keyser が P. Simson の書 (Geschichte der Stadt Danzig, 1913–1918) を利用して同市の今日に到るまでの短い一讀に値する歴史を發表してゐる (Danzigs Geschichte, 1921, 1929)。その他、ダンチヒに就ては E. Keyser の Pfingsblatt des Hansischen Geschichtsvereins, 15 (1924, 1928) にある論文、R. Koebner (Urkundenstudien zur Geschichte Danzigs und Olivas von 1178–1342, 1934), H. Frederichs (Die Gründung der Stadt Danzig, Hans. Geschichtsbl., 1936) の書を參照すべきである。トルンに就ては M. A. Semrau (Die Marktgebäude in der Altstadt Thorn im 13. und

13 Jahrhundert, 1916 ; Urkunden des Stadtarchivs in Thorn, 1922) 及びポーランドの學者 L. Koczy (Materialy do dziejów handlu Hanzy Pruskiej z Zachodem, 1934) と M. Magdański (Handel Torunia namorzu w wiekach średnich, 1935) を、ケーニヒスベルグに就ては W. Franz (Geschichte der Stadt Königsberg, 1934) を見るべきである。Elbing に就ては一九三七年の創立七百年祭を期待し得る。今日エストニヤの首府なる Reval (Tallinn) に關しては O. Greiffenhagen (Das Revaler Bürgerbuch 1409–1624, 1931) と G. Adelheim (Das Revaler Bürgerbuch 1624–1690–1710, 1932; Das Revaler Bürgerbuch 1710–1786, 1934) の書を參照すべきである。更に西方に轉じて Goslar に關しては K. Frölich の貴重な研究 (Zur Ratsverfassung von Goslar im Mittelalter, Hans. Geschichtsbl., 1915 ; Die Verfassungsentwicklung von Goslar im Mittelalter, Zeitschr. d. Savigny-Stiftg. für Rechtsgeschichte, Germ. Abt., 47, 1927 ; Zur Topographie und Bevölkerungsgliederung der Stadt Goslar im Mittelalter, Hans. Geschichtsbl., 1920–1921 ; Beiträge zur Topographie von Goslar im Mittelalter, Zeitschr. des Harzvereins für Gesch. und. Alt., 61, 1928 ; Die verzeichnisse über den Grubenbesitz des Goslarer Rates am Rammelsberge um das Jahr 1400. Ein Beitrag zur Bergpolitik der Stadt Goslar im 14. Jahrhundert, Hans. Geschichtsbl., 1919 ; Zur Kritik der Nachrichten über den älteren Bergbau am Rammelsberge bei Goslar, Archiv für Urkundenforschung, 7, 1921) があり (なほ E. Feine, Der Goslarische Rat bis zum Jahre 1400, 1913 を參照すべし)、フランケンハイムに就ては Rörig の門弟 F. Timme が師のリューベックに對すると同じ事業を此の都市に對してゐ

試みてゐる (Die Wirtschafts-und verfassungsgeschichtlichen Anfänge der Stadt Braunchweig, 1931)。ブレーメンに就ては W. von Bippen (Geschichte der Stadt Bremen, 1892–1904) の他に G. Bessell も短い良著 (Bremen. Die Geschichte einer deutschen Stadt, 1935) を出してゐる。なほ J. Müller (Handel und Verkehr Bremens im Mittelalter, 1927–1928), H. Entholt (Veröffentlichungen aus dem Staatsarchiv der freien Hansestadt Bremen, 1928–1930) の名も記憶すべきであらう。往時ハンブルグと比肩して其の隆盛を誇つた Stade に就ても H. Leptien の書(Stade als Hansestadt, 1933)がある。ハンザに加はらなかつた Emden の活躍に就ては B. Hagedorn の美事な研究を參照すべきである (B. Hagedorn, Ostfrielands Handel und Schiffahrt im 16. Jahrhundert ; Ostfrieslands Handel und Schiffahrt vom Ausgang des 16. Jahrhunderts bis zum Westphälischen Frieden, 1580–1648—Abhandlungen zur Verkehrs-und Seegeschichte, 1910–1912, 更に補足として Betriebsformen und Einrichtungen des Emder Seehandelsverkehrs in den letzten drei Jahrzehnten des 16. Jahrhunderts—Hans. Geschichtsbl., 1909, 1910)。

海岸に於ける之等の諸都市の奥地に關しては先づウェストファリヤに就て H. J. Seeger の研究 (Westfalens Handel und Gewerbe vom 9. bis zum Beginn des 14. Jahrhunderts, 1925) があり、近く E. Dösseler の論文 (Der Handel und Verkehr Westfalens mit Köln zur Hansezeit—Jahrbuch des Köln. Geschichtsvereins, 1936) も出て此の方面の研究は完成された。Soest に就ても F. von Klocke の研究 (Patriziat und Stadtadel im alten Soest, 1927 ; Aus Soester Vergangenheit, 1927 ; Zeitschrift des Vereins für Geschichte von Soest und der Bör-

de, 42, 43, 1927)、Dortmund に就ては L. von Winterfeld の研究 (Geschichte der freien Reichs- und Hansestadt Dortmund, 1934 ; Pfingsblätter der Hansischen Geschichtsvereins, 23, 1932 ; 16, 1925) がある。ケルンに關するものは實に數多いが、特に看過すべからざるものとしては B. Kuske のもの (前出) と Ermentrude von Ranke のもの (Köln und das Rheinland. Ein Ausschnitt aus dem Wirtschaftsleben des 16. und 17. Jahrhundert–Hans. Geschichtsbl., 1922; Kölns binnendeutscher Verkehr im 16. und 17. Jahrhundert–ibid., 1924 ; Von kaufmännischer Unmoral im 16. Jahrhundert–ibid., 1925; Das Hansische Köln und seine Handelsblüte–Hansische Volkshefte, 6, 1924 ; Die wirtschaftlichen Beziehungen Kölns zu Frankfurt-am-Main, Süddeutschland und Italien im 16. und 17. Jahrhundert–Vierteljahrschrift für Soz.-und Wirtsch. Geschichte, 17, 1924) とがある。

(一九三七、十二、七)

三、プレステド石器時代の文化 (上)

間崎万里譯

はしがき　プレステド博士の生前に於ける最後の著述として大文化史「古代」の改版を見たことは既に本誌(十四の四)に報道した所であるが、今又ロビンソン氏等との合著 History of Civilization : Earlier Ages, 1937 を手にすることが出來た。後者は、一九一四年に初版を刊行した Outlines of European History, Part I. の幾度か改訂、改題せられたものの最後の形であつて、前者に於ける新研究が攝取せられた清新なる古代、中世史の教科書である。自分は小「古代文化史」の譯本刊行の際、博士から追つて出づべき新著によつて補訂を希望せられてゐたのであるが、近くこの兩著、主として後者に基づく改訂版を出して、その責任の一部を果たさんとするに方り、最近に於ける古代史の研究中進歩の最も著しかつた史前文化の部分をより詳細なる大文化史(第一、二章)の飜譯を掲げて、舊譯の讀者並にこの方面の研究に親しみ薄き人々の參考に供すると共に、併せて教科書記述の一樣式をも示さうと思ふ。

本書の記述は頗る簡單で且つ平易通俗的であるけれども、內